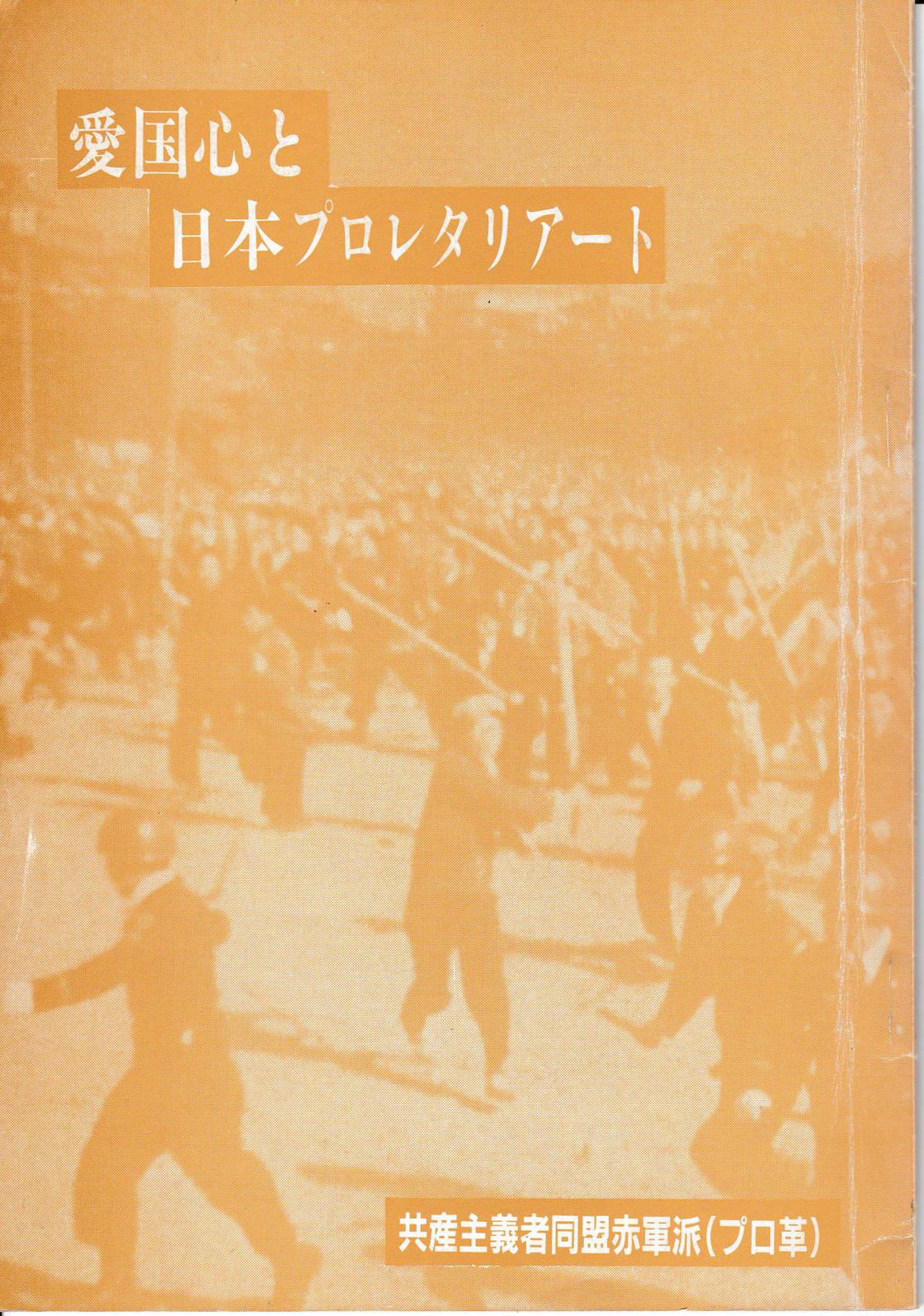


愛国心と

日本プロレタリアート



共産主義者同盟赤軍派(プロ革)

もくじ

愛国心と 日本プロレタリアート	水田 恵	4
愛二題——性愛と愛国心	水田 恵	18
天皇制ナショナリズムから 愛国心を奪いかえそう	町田和行	25

はじめに

この小冊子は、抑圧民族——戦前「忠君愛国」（天皇制ナショナリズム）で中国・朝鮮・アジア人民への野獸的侵略を行った日本民族——の「愛国心」（ナショナリズム）をとりあつかっている。

「世界」三月号、伊健次「教育改革における民族問題」は、我々（日本人）に大きな思想的衝激を与えた。在日朝鮮人であるが、我々（日本人）には「愛国心」「民族的自覚、民族の独立と民族間の共存の自覚」が必要だと主張しているからである。

我々（日本人）はいつも、「愛国心」というとあの例の「猫背の男」と南京虐殺を思い浮かべ、戦後すつとその不快な思い出から目をそらしてきた。実は目をそらしていただけで、今回の論文やこの間の指紋押捺拒否闘争の高揚をみるなら、日本社会の内には、戦前から一貫して、アジアの民族への南京虐殺的排外主義が延命しているのを感じしらせる。我々（日本人）はアジア人民虐殺の張本人である天皇を延命させた、民族的責任も反省もはた

さなかつた「日本民族」であることを自覚させてくれる。我々はいつも「キーセン観光」に恥かしく思い、日本人に絶望してきた。しかし又明治維新——自由民権運動に発する日本「民族」の革命的伝統に誇りとかぎりない共感を覚えてきた。我々は日本人としての複雑な感情に悩まされてきた。これは多分日本民族としてしか生きれぬ日本プロレタリアートの思想的苦痛であろう。

大島者のように抽象的「人間」(コスモポリタン)に逃げこんでアジア・朝鮮民族の糾弾に居直るのは、戦後「日本民族」から目をそらして生きてきた進歩的文化人、新旧左翼の醜悪な思想的破産——反動化である。

「民族的誇りにみちあふれたわれわれ大ロシアの労働者は……あらゆる革命的手段をもって、自分の祖国の君主制や地主や資本家、つまり、わが故国の最悪の敵と戦う以外には……祖国を擁護することはできない」(レーニン大ロシア人の民族的誇りについて)

日本人が「民族的自覚」をもつことを最も恐れたのは、戦前アジア諸民族を虐殺し、戦後米帝に民族主権を売りわたして「国体」を護持した天皇である。六六年の「期待される人間像」で「天皇中心の民族秩序」(忠君愛国)

の説教をやりながら、日本人の「民族的自覚」「民族の自立・自存、民族間の対等・互恵の共存」ということが棚上げされていた。臨教審等敵の出す「愛国心」というのは、実は、アジア人民への侵略・差別・排外主義のことであり、米帝の鉄砲玉として更に従属しつつ、日本列島の核戦場化、祖国と民族を一挙に滅亡においやる奴隷思想である。

日本民族は二つのあい戦う階級に分裂していること、そして支配階級とその国家(天皇資本家)は自己の階級的利益のために「愛国的文句」(忠君愛国)で人民を腐敗させ、民族を戦争と飢餓——滅亡のふちにおいやっているのである。やつらの階級的利益は、民族の利益ときびしく敵対しているのである。

プロレタリアートだけが——広汎な人民の内で日本民族としての思想的苦痛を引き受けながら——わが民族の「最悪の敵」を「革命的手段」で打倒し、民主主義・社会主義へと結びつけながら、真に戦前の民族的反省を行うの、民族の自立・自存、民族間の対等・共存を実現しうるのである。

プロレタリアートの「愛国」とは「憂国」である。

# 愛国心と日本 プロレタリアート

水田 恵

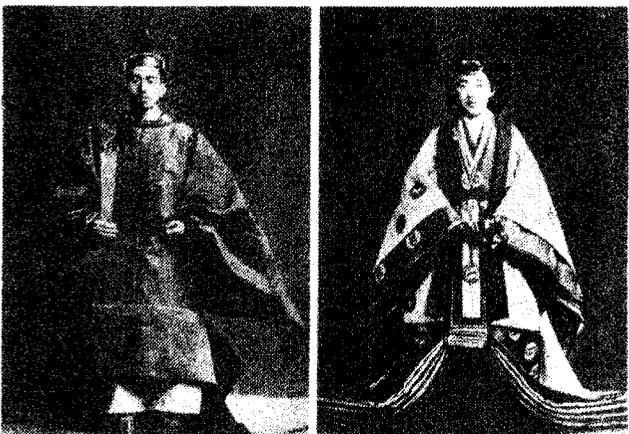
## 一章 日本民族の愛国心

愛国心とは人間がその内に生まれ、その生存が保障され、自己を形成し、自覚させてきた家族、郷土(共同体)、民族を總括する国家への無限のいとおしき、なにともしかえのてさない、そのものへの排他的な感情である。民族と国家を同一とみるのはマルクス主義ではない。この二つを区別しつつ、民族の自立と生存を基礎に統一をつけることによって、愛国心は全うすることが出来る。

過去日本人の大多数の愛国心(「シヨリズム」は「忠君愛国」に変形された天皇制「シヨリズム」でしかなかった。このことは明治維新による日本民族の統一が天皇(制)によってしか体现されなかつたからである。

近代日本の民族の統一とは、封建制度の胎内から、商品経済の発展―産業資本の形成と国内市場の統一の力によって、封建制度の下での国内の政治・経済的分散がうち破られたところに成立する歴史的産物である。だが日本ではアジア的性格をもった封建制があり、商品経済の発展が産業資本の確立へとストレートにすすまず、商業資本が封建制への寄生性を強め、アジアの高利貸しが寄生地主に転化するなど、自主的な、下からの資本主義の生成を停滞的なものにした。

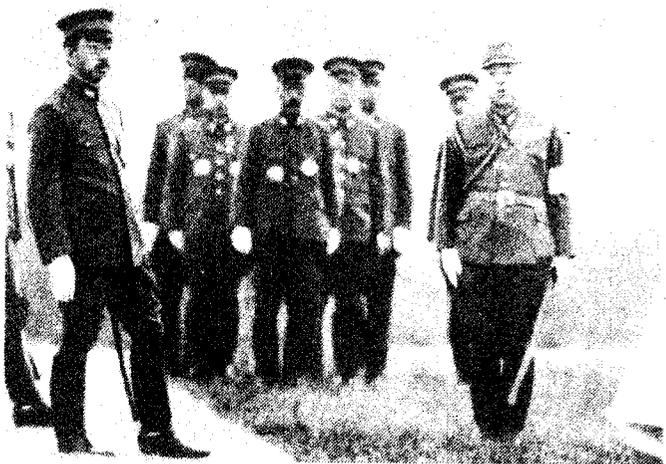
だから明治維新は、危機におちいつた封建的な支配階級が、商品経済の発展―農民一揆の反抗の増大・ブルジョワ革命と帝国主義に転化しはじめた欧米資本主義の侵略の脅威の中で、西南雄藩の下層武士階級を主体に、なすすべを知らずに動揺する分封土的封建制に徳川幕府を打倒し、中央集権的封建制・有司専制をうちたてた絶対



二八年十一月十日、皇室典範に基づき、ヒロヒトが一二四代目の天皇となる「御大礼」(即位式)が行なわれた。ほぼ一年を通じた儀式は、国家支出の費用のみで約一千万(現在の約四百億円)にも達した。

主義革命となった。日本ではこの民族の「統一」「自立」が西洋流にブルジョア階級の手によって確立したのではない。日本ブルジョアジーは、その歴史的な形成過程からいっても、天皇制に依存した非自立的な「生まれたときからの老いぼれ」であり、雄々しく、誇りをもった、自分の足で立つ新興階級としての清新さなどどこにもなかったのである。

結局日本「民族の統一と自立」は、下層武士階級―「有司」によってかたぎ出された「天皇家」を体现者とするしかなかった。この時「天皇家」の伝統的な宗教的権威と「万世一系」が、「本来の日本の支配者」の「証明」として宣伝されたのである。この天皇制ナシヨナリズム（絶対主義天皇制）の確立は、資本主義大工業の発展を大々的にうながした。それとともに対抗的に日本プロレタリアートの国民的民族的結集を可能にし、天皇・資本と労働者・被搾取労働人民の階級対立を、全国的、国民的規模に拡大し、公然化、激化させざるをえなくさせた。資本主義・資本家による「民族の統一と自決」（ナシヨナリズム）は、実は、資本と賃労働の階級対立を公然化、激化させるプロレタリアートの社会主義に向けたさげられない



空挺部隊の訓練を視察するヒト  
ヒト 右から四人目 杉山参謀総長  
と東条首相兼陸相（四二年）  
大日本帝国憲法は「天皇は陸海軍を統帥す」と定めていた。陸海軍に関しては、参謀総長や軍司令部総長は命令権も執行権もなく、軍隊を動かせるのは、天皇のみであった。

政治的回路である。我々は愛国心（ナシヨナリズム）を、資本主義の歴史的進歩とともに評価するものである。マルクスもプロレタリアートは「みずから『民族的』であることなしに強くなり、成人し、成熟することはできなかった」（『共産党宣言』）と書いている。

「忠君愛国」「天皇制ナシヨナリズム」は、一九二〇年代の大正デモクラシーに洗礼され、これと対抗的に、二九年恐慌・三〇年代の日本資本主義の体制的危機のうちに、「世界に冠たる」「一君万民」の「国体」へと発展した。この「国体」は同時に治安維持法の制定・改悪・日本人民の解放闘争の前衛・日本共産党への弾圧、日ファシズム体制の確立の最重要のてこになった。この「国体」は「八紘一宇」「大東亜共栄圏」の侵略思想となり、中国・朝鮮・アジア人民への無暴・非道の侵略・略奪・虐殺の思想となり、同時に数百万人の日本人民を死にいたらしめ、あげく動物的生活を強制し、国土を荒廃させ、日本民族の自立さえ米帝に売りわたす奴隷思想に転化したのである。

愛国心(ナショナリズム)は他民族を侵略せず、他民族に侵略されず、真の民族の自決と統一をめざす心情であり、運動である。民族と国家の分裂を階級的利益とし、人間が人間を奴隷とし搾取し、ある民族が他の民族を奴隷とすることによってしか成り立たない搾取社会(資本主義社会)では、それは十分に、完全には実現しない。それは階級支配の廃止とともに「ある民族が他の民族を抑圧する必要のなくなった」社会主義の実現によって「プロレタリアートの革命的隊列のうちに現実のものになる」。

徹底したナショナリズムは、徹底したインターナショナリズムである。

そして七〇年代(八〇年代)のいま、有象無象の反動的イデオログたちが「天皇は神だ」「天皇のために死んだ愛国の英霊を祀る靖国を国家で管理せよ」と愛国心、天皇制ナショナリズムの説教をやりはじめた。これが臨教審である。この愛国心の説教は、実のところ、日本の民族主権を更に米帝に売りわたし、再度のアジア侵略に日本人民を動員する茶番である。

天皇制ナショナリズムが日本の民族自決と統一・愛国心を体現し



殺し方あまりに残酷なため、「対外的不利」という理由で不許可となった写真。いずれも撤退におくれ、捕えられた中国軍兵士

てきた「幸福な時代」は日本歴史のはんの「イマ」ではない。現在再度吹聴されはじめた「忠君愛国」の天皇制ナショナリズムなどはタネのわれた手品のような「亡国」「売国」の煙幕ではない。目を開けば「愛国心」をとる天皇、反動家、資本主義搾取階級達は、戦後米帝に仕はをふり、奴隷になることで自身の腐肉を肥らしてきた、真正の愛国心などかけられない徒輩である。日本人民の民族と愛国の「心情」をあおりながら裏切り続けてきた「不正」集団である。私利私欲のために国を売る人間が「愛国の専売者」として又ぞろこうかつな悪党づらをさらしはじめたのである。

現在、「天皇制ナショナリズム」・「祖国」「民族」「愛国心」が叫ばれる程に、その内包する決定的矛盾を暴露せざるをえないし、再度「祖国」と「民族」を荒廃と滅亡に導く陰謀でしかないのである。この数年の日米共同戦争体制の強化(トモホーク配備と軍拡)という米帝への一層「従属」の強化を策動する、その同じ人間が「忠君愛国」の天皇制ナショナリズムを宣伝しているという一事をみて、天皇(制)が日本民族の「主権」を売りわたす、日本民族にとっての「疎外物」「腐れた日本の一切の搾取階級の支柱として」である

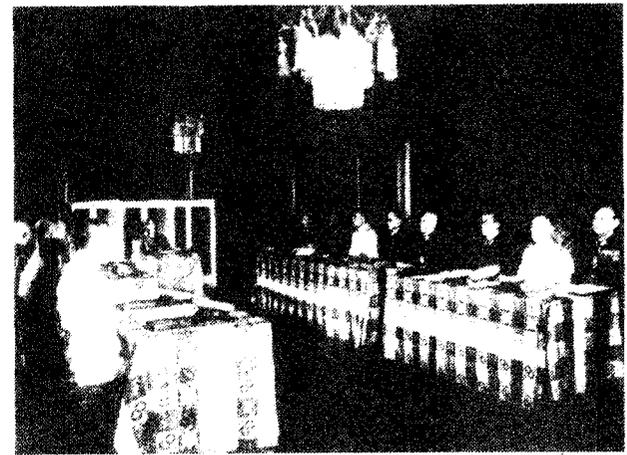
真の愛国心（ナショナリズム）を、天皇制とそれを支えるあらゆる歴史のガラクタどもと戦い、プロレタリアートの隊列と社会主義実現のうちにちかちとらなければならぬ。

民族と国家とを相対化し、民族とその生存を危うくする「国家」（天皇制及びブルジョアジーの国家）をうち倒し、真の民族の統一、自立、社会主義の国家をうちたてる「革命家」こそ真の「愛国者」の条件である。

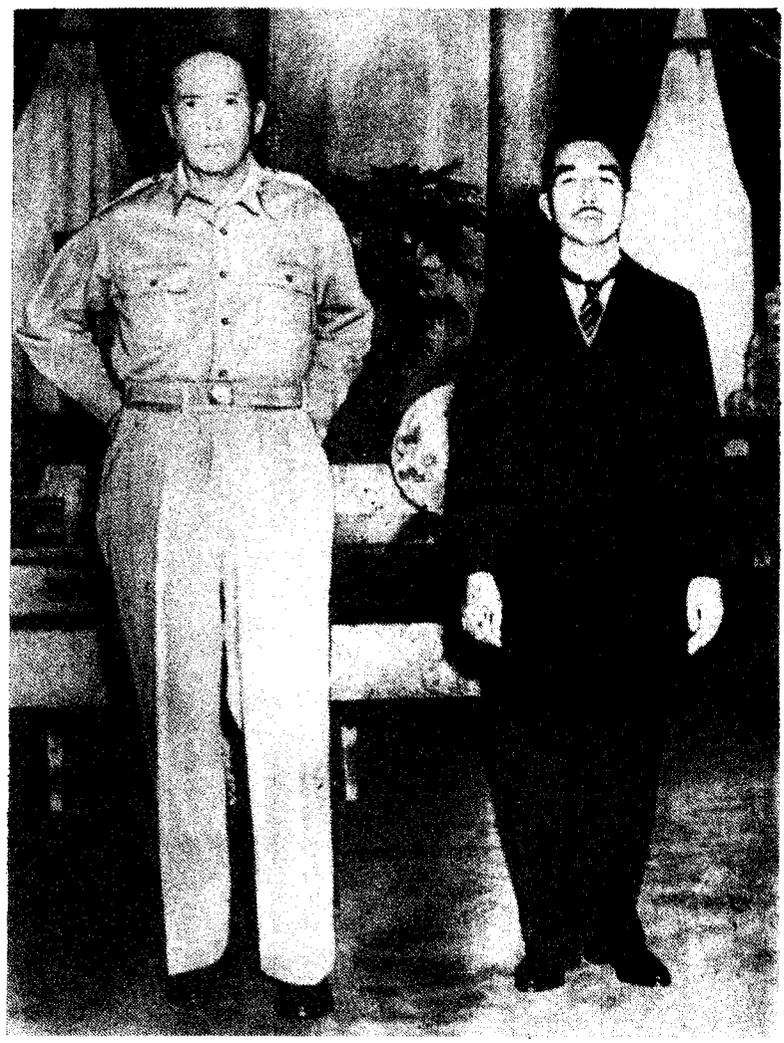
## 二一章 諭吉と秋水 ——二つの愛国心

福沢諭吉「帝室論」は「国論の二分を回避する矛盾の調整機能として天皇、皇室の役割がある」と書いている。

「我帝室は日本人民の清新を収攬するの中心なり。…国会の政府は二様の政党相争ふて、火の如く水の如く、盛夏の如く嚴冬の如くならんといえども、帝室独り万年の春にして、人民これを仰げば悠



国務・統帥一元化を図って設置された最高戦争指導会議、戦意高揚の為、四五年元旦、各紙が一斉に掲載した。



売国奴天皇は「国体護持」と引きかえに米帝に国家主権を売り渡した

然として和氣を催すべし。」「本来我輩が我帝室の神聖を護りて之を無窮に維持せんとするは、日本社会の中央に無論無党の一焼点を掲げて民心の景望する所と爲し、政治社外の高処に在て至尊の光明を放ち、之を仰げば万年の春の如くして万民和楽の方向を定め、以つて動かす可らざるの国体と爲さんと欲する者なり。」

福沢は明治維新以後日本民族の統一と自立の体現者として天皇(制)―「無窮」の「国体」に依存してきた日本ブルジョアジーの思想的特質をみせてくれる。福沢は「天皇制という形であれ、人民の愛国心を味方と感じ、それに訴え、そのことがまさに祖国の進歩に合致するような時代に生きていた」(石母田正「幸徳秋水と中国」)―民族と愛国心の問題について―)のである。

この福沢の「調整機能」こそ、天皇(制)を社会的対立、「係争の外」におき、「万民和楽の方向」を定め、日本民族の統一の体現者としえたものである。藤田省三(「天皇制国家の支配原理」)は、これをムラ共同体(郷党社会)の秩序原理を国家原理として昇華したものであり、「無窮の国体」としての教育勅語であるとし、これこそ明治の権力者がつくり上げた最高のものであると書いている。



マルクス主義者は「天皇制ナショナリズム」の内に、民族の統一と自決をうながし、日本労働者階級の歴史的登場と階級的・民族的結集を可能にしたということを認めよう。

しかし「天皇制ナショナリズム」が一八九〇年代の日本資本主義の帝国主義への転化のうちに、まさに日本民族の敵対者としての正体をあらわしはじめてきたことを注目すべきである。

幸徳秋水はこの転化の時期に生きた革命家である。かれは自由民権運動の敗北から、一九二二年の日本共産党結成に向かう日本人民の解放闘争の最良の前衛であり、橋わたし役であった。絶対主義天皇制のしかけた日清・日露戦争を糾弾し、ロシア革命に接近し、朝鮮・アジア人民の解放闘争に共鳴し、当時日本人民の革命的えい知を体現した革命家であった。日本人民の誇りうべき革命的伝統の、輝く頂点にいる。

しかし「忠君愛国」「天皇制」に変形された愛国心・「天皇制ナショナリズム」(日本民族の帝国主義的、排外主義的、侵略主義的動員的手段となった)を批判する余り、秋水は「愛国心一般」を否定してしまう誤りを犯した。

四八年年頭、「人間宣言」をした天皇は、その後神奈川を皮切りに、米軍に守られて全国を「巡幸」し、天皇制打倒、民主化を求める労働者人民の闘いを屈しつつぶっていた

「愛国心」を「野歌的天性なり、迷信なり、虚誇なり、好戦の心なり」と排外的愛国主義と同じのものとし、これと対立させつつ民族、祖国を超越した「人類愛」を主張し、無政府主義的空論に解体した。更に秋水は朝鮮民族の独立について「国家的」自立を否定する誤りさえ犯した。このことは帝国主義的な抑圧民族の「インテリ」に特有なごう漫さに端を発する大アジア主義的転向に大きく接近するものである。大杉栄の中国人革命家の蔑視の「ヒソードほど天皇主義的腐敗に足をとられてあかく抑圧民族インテリのか細さ、惨めさをあらわすものはない。

そのあげく秋水は日本人民の「民族と祖国への愛情」「愛国心」の発展を否定し、天皇制ナショナリズムに組織された「国民」にさえ一般的な不信をならべ、日本人民の愛国心の暗く陰湿な側面にしか目につらなくなつてきた。「革命家として最も危険な兆候」（石母田正）に足をすくわれはじめた。

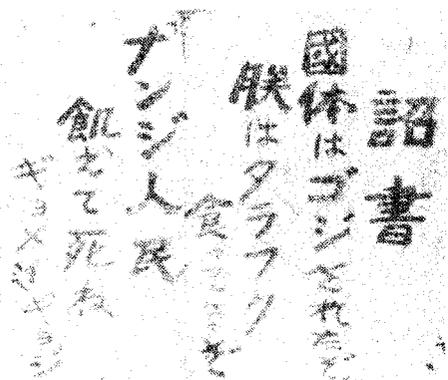
秋水の絶対主義天皇（制）への敗北は思想的にはさげられないものになつていた。かれは日本民族の統一、自立、愛国心の主要なない手であり、国際主義の体現者であるプロレタリアートを「発見」

できなかつたのである。

## 三章 日本プロレタリアートは愛国心を 天皇制打倒の武器とせよ！

長い日本の歴史の進歩の中でつくられてきた日本人民の祖国への「愛国心」を、天皇と資本家の階級的利益のために人民の生活と生存を危うくし、祖国を発展させ、自民族を他民族に従属させるような愛国心（？）・天皇制ナショナリズムと区別し、社会主義と国際主義のもとに組織し、テロと戦争準備策動に熱中する支配階級との戦いの武器に転化しなければならない。

「天皇制ナショナリズム」を日本人民の「愛国心」と同じものとし、日本人民の「民族の自立と統一」「愛国心」を頭から否定するのが小ブル社会主義・日本型トロツキズムである。かれらは幸徳秋水の負の継承者であり、大杉の二度目の茶番を演じつつある。そうしてかれらは日本人民の具体的な「主着的」生活心情から遊離してしまい、自己を日本民族としか生ざられぬ、その内ですべて思想と感

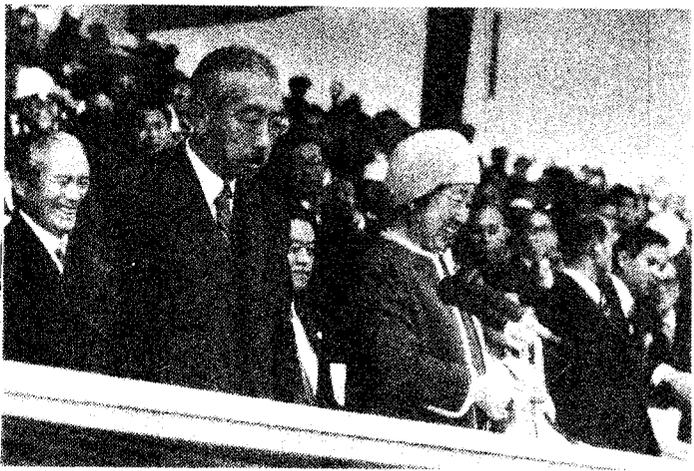


「人間皇」後の四六年、「朕はクラフク食つてるぞ」のフランクを食糧メーターに発行した松島松太郎が、一ヶ月後の二二日、「不敬罪」で起訴された

情を形成してきた、日本プロレタリアート・大衆の組織者、前衛党であることを否定してしまった。かれらの内から第三世界・被抑圧民族の「国家的」自決まで否定する潮流を生み、あげく大田竜のように天皇主義者として自称しつつ八紘一宇の大アジア主義を公然と主張する部分まででてくるようになる。

日本共産党（宮本一派）の「愛国心」とは、反米だが、しかし天皇制（ナシヨナリズム）批判がなく、そのために民族の自決・統一が無媒介に伝統的・復古的なものに求められることになる。今や「自主独立」のかけ声の裏で、民族排外主義がしきりにあおられている。一水会など新右翼の「愛国心」「民族主義」は、反米「忠君愛国」の天皇制ナシヨナリズムである。

かれらは過去の大日本帝国の栄光に思いこがれ、戦後天皇（制）自身が米帝に日本民族の主権を譲りわんず奴隷になりさがることで延命したという戦後史の事実を故意に忘れていいのか、それとも体制的利権右翼からの「金と地位」の誘惑に目がくらみ、「反米」を叫んで日本人民の「愛国心」をくすぐりながら、「天皇制ナシヨナリズム」で「親米売国」への回路をつくる皇道派的ヒエロメをめぐらしている

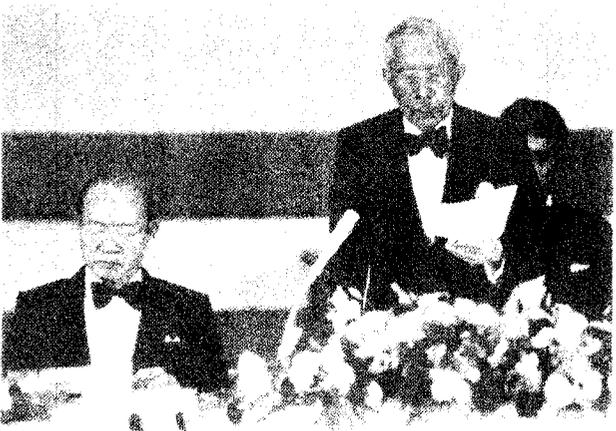


春の植樹祭、秋の団体など天皇の外出を「行幸」というが、いずれも厳しい「戒厳体制」がしかれる

のかである。

日本プロレタリアート・人民の内にある豊かで、繊細で、自己犠牲と協調心に富む「愛国心」を天皇制ナシヨナリズム、軍国主義・侵略主義からうばえかえし、国際主義と社会主義のもとに組織しよう。我々は日本人民の民族的伝統、文化、生活習慣の内に育成された「感情」の組織者となり、天皇と資本家の暴圧の下に磨げられてきた広範な被搾取勤労人民の全ての苦痛、「恨み」の組織者となるう。

この日本人民の「愛国心」の組織化こそ、日本の近代を切り拓き、民族の統一と自立を実現した偉大な革命――明治維新と自由民権運動の革命的伝統を引き継ぐものであり、これこそ日本民族の最良の子弟である日本プロレタリアートの歴史的使命である。



八四年九月六日、来日した「韓」国の大統領全斗煥との会談の中、「過去の不幸……誠に遺憾」と一言のへ、過去の侵略、虐殺を一切清算した

# 愛二題——性愛と愛国心

水田 恵

## その①

「自由恋愛主義」というのが、「女性解放」という看板で味付けされながら、小ブル社会主義の新左翼と、左傾「文化人」(?)の間で流行っている。だが一皮むいてみなさい。事実は、陰湿で恥知らずな、地位と名譽のある男どもの性的放縱と自墮落さの煙幕になっているのが発見できるだけである。

現代の日本の男どもは、封建的家族との女

性の必死の格闘(自由恋愛主義)の内に、新しい自己の性的奴隷の貯水池を発見したのである。これは女性を支配者階級の男どもの共同の性的道具としてしか考えない、最も悪質で、伝統的な女性差別思想の復活である。

第四インターの労農合宿所をめぐる大量の強姦・未遂事件では、「女性解放」という進歩の旗印が、「地位のある男達」の野獸的な性欲を達成する名文になっていたのである。

我々はこれを日本の伝統的なムフ共同体(アジア的遺制)に包括された男女関係(家族関

係)IIアジア的家父長主義とした。これは封建的家族制度がまた「進歩」といえる程うすぎたない反動性をもっている。そして日本の資本主義は、天皇(制)に総括されるこのアジア的「反動」を支えに産声をあげ、成長してきたのである。封建制に反対する自由主義が実は政治「反動」に包括されてしまう歴史的条件である。

「性愛」は、エンゲルスによると、平等の自立した男女の相互にこたえあう「愛情」があり、性は二人の結びつきの強度、持続力に支えられた愛情をつうじてのみ実現されるということである。この男女関係は、単婚制ではない。単婚制は男が女を家内奴隷とする「自然発生的」家族(性的奴隷)に成り立つはずもなく、プロレタリアートと社会主義実現のうちに始めて現実のものになる。これをプ

ロレタリア単婚制という。日本資本主義の基底にのこるアジア的家父長主義の影響の内にて性・愛の二元的分離に悩む大多数のプロレタリアは、プロレタリア女性の解放の隊列の発展にうながされ、自己の階級隊列発展のうちに、プロレタリア単婚制を先行的に実現するのである。人類の婚姻の歴史とは人間の一般的性欲を個人的性愛へと発展させる(過程)であり、プロレタリアと社会主義の内にも人類は男女関係の真の理想を実現する。

この一〇年間資本は、労働者の首切り、合理化、賃金抑制攻撃を一段と強化し、大量の女性を労働過程へとひきだした。しかしこのことが女性の階級的隊列と自覚の発展へとそのまま結びつかなかつた。

進行する労働者家族の不安と解体の増大、そして学校の「いじめ共同体化」(子供の非

行と「いじめられっ子」は「母親の家庭不在」が原因とされ、働かなければならない母親たちが、実は「家庭崩壊」の責任を引き受けさせられているのである。

この母親たちは、結局ハート等の安価で、従順な新しい搾取材料として資本の高利潤の源泉に再編されている。男女雇用機会均等法や労基法の改悪がそれである。

しかし更に大事なことは女性への差別抑圧の強化と家族のフアッシュヨの再編の進行である。時代の強制である「亭主」の家父長権の動揺は、母親達の政治的自立と階級隊列の発展にものをいわせ、家内奴隷の克服―男女の関係を純粹に性愛のみにもとずいた社会主義家族へと高める好機であった。しかしむしろ「亭主」の失われつつある「家父長権」の奪還のための暴力の前に沈黙しつつ、子供の非行、

いじめられっ子等の家族問題をアジア的・フアッシュヨ的に解決し家父長権を地域・学校等「共同体」の政治的指導者に「委譲」しつつ（アジア的家父長主義）―していくしかないところにおいこめられている。この場合マイホーム主義的「母性」は、男女の「性愛」にもとづいた関係を基礎に、階級的―社会的母性へと発展させられず、無内容、無批判に「共同体の母性」「靖国の母」つまり皇国への忠誠を子供に強制するフアッシュヨ的母性へと移行してしまっているのである。

わが自由恋愛主義者は、七〇年代から八〇年代にかけ、「家父長権」の動揺にともなう女性の画期的な歴史能力の蓄積を歪曲し、フロレタリア女性にアジア的「淫売宿」(レーニン)の袋小路―凶々しくし女性解放のスイーガンで―においこめようと策動している。これは

全くマイホーム主義的家父長権の解体の上に女性の新しい独自要求を「靖国の母」(アジア的家父長主義)へと再編しようという敵的策動に便乗したものである。かれらはアジア的反動性を身にまとった支配階級の女性蔑視と性的放縱を、小ブルジョワ的な「性の解放」「母系制の復活」などという名目でフロレタリアの階級隊列にもちこみ分裂を策す歴史の「ミ」でもある。

## その②

愛国心の「愛」も、性愛の「愛」が独立した平等の人格を前提するように、それぞれの民族の統一と自立のうちにのみ獲得できる心情である。民族の統一と自決を実現する国家への「愛情と奉仕」をいうのである。

このことはある民族が他の民族を奴隷とさせないような、あらゆる民族の平等な関係を確立することであり、人が人を搾取し、他の民族を自己の奴隷とする搾取社会―資本主義社会では、そのことは不可能であり、フロレタリアートと社会主義の内でのみ、愛国心の真の達成が可能である。そして民族の間の対等・平等の実現こそ、国際主義―世界社会主義共産主義の政治的前提である。

戦後日本は「民族」の自覚と誇りをうながす、「民族教育」が放棄されてきた。「世界」三月号、伊健次「教育改革」における民族問題―では、この「民族教育」の放棄が、日本民族の悲劇非道の数々を真に反省することがなく、忠君愛国の天皇制ナショナリズムの民族排外主義を「平和と民主主義」の内に延命させてきたと指摘している。

まことにもつともなことで、「愛国心」というと頭から「排外主義」ときめつける頑迷固陋の新左翼から出てきた我々にとつて、少なからずシヨックな論文である。民族と愛国心からの逃避ゆえに、我々の内にも天皇主義と排外主義がひそやかに延命することになったのである。

日本の「民族教育」の放棄は、実は日本民族の内から戦前の忠君愛国・天皇制ナショナリズムの糾弾がおこるのをさけるために、そして戦後米帝に従属し、民族主権をゆずりわたり、奴隷化することによって延命した天皇、官僚、資本家どもの陰謀であつた。まんまと「左翼」をそれにのついたのである。

しかし臨教審で、再度「忠君愛国」「天皇制ナショナリズム」の復活・「民族教育」の必要が叫ばれているが、実のところこれは米帝へ

の一層の従属を強化し、アジア侵略「世界戦争」に、米帝の鉄砲玉になるよう日本民族をかりたてる煙幕であり、民族の自立と生存さえ更にあやうくするものである。

民族の統一と自立を天皇(制)に体现させ、戦後民族教育を放棄した、此の日本「民族」の自立心、誇りのひ弱さにつけこみ、民族の自主、自存の権利を放棄することが「民族を守る」ことだというような、奴隷的「愛国心」が「当然天皇制ナショナリズム」として「恥知らず」にも宣伝されている。

しかしながらが自主的な民族の文化と伝統「愛国心」を語れば語るほど米帝へのその奴隷根性が明るみに出、日本プロレタリアートの内から真の「愛国心」への要求が、それこそ対抗的に湧き上がらざるをえないのである。

御機嫌のものと世界の人がかみんを一家のやうにしましめあひしあはせに暮すやうにといふのが我が國の定めてあるめざすところでありませぬ。昭和の大舞臺となつて今や大陸から南方へかけて東亞の民族や國々はわが天日本を中心として一體となりまたはみんが世界の人もやうやく益さめてわが國のめざすところにならばすてゐませぬ。

私たちがこのやうなありがたい國に生まれたことをよく考へて愛國の忠臣としてはつつかしくいふやうに、羅馬のおこなひをとりつばにして行くことが大切です。私たちは一生けんめいになつて天日本をますますさかんにしなければならぬのであります。



1943年、文部省発行の国定教科書

今「忠君愛国」「天皇制ナショナリズム」が日本の民族的自立と愛国心を体现すると考えているのは、米帝への従属の強化によつて私利私欲の肥大をはかる、天皇を頭とする極悪の反動家売国奴・ファシストどもか(勝共や利権右翼の民間ファシストたちも)それとも戦後史に無知な、あるいは事実を事実としてみようともしない小ブルインテリの青年層の一部「小ブル社会主義の新左翼か一水会等のファッション右翼」である。

日本民族の歴史と魂・自省心と誇りを教育することが「とりわけプロレタリアートとその子弟を教育することが「再び南京虐殺の悲劇をくりかえさせず、民族の自立と生存を確保する道であり、プロレタリアの階級的自立の道」である。

愛国心を忠君愛国・天皇制から解放し、プ

明治四十三年の春第六期水領は演習のため山口縣新港沖へ出ました。午前十時潜航を始めるとまもなく艇

二 佐久間製鉄の遺書

明治四十三年の春第六期水領は演習のため山口縣新港沖へ出ました。午前十時潜航を始めるとまもなく艇

プロレタリアートの内に、国際主義と社会主義に接近する真の愛国心・民族の自立、自存の魂をつくりあげよう。真の共産主義者は真の愛国者である。

## あとがき

である―を克服・止揚に向かう道である。この二つの「愛」をマルクス主義・プロレタリアートの「世界史的任務」の土台の上で発展させることは、天皇主義への転向の「出発点」となった「土着主義」「近代主義」を批判し、日本「民族」としてその生活と感情・意識をつくりあげてきた日本プロレタリアートの心情―「恨み」―を組織する最大の武器になるのである。

日本の共産主義者の理論課題は、一つは日本の民族的特殊性に基礎づけられた資本主義の「生成、発展、没落の全歴史過程」を明らかにすること、もう一つは、この資本主義の発生によって生まれ、発展によって強大になり、この資本主義の没落―社会主義実現をになうプロレタリアートを、目の前に、具体的に発見することである。このことが日本共産主義運動の「土着主義」と「近代主義」の分裂・克服―当然これは日本近代思想史の特徴

# 天皇制ナショナリズムから

# 愛国心を奪いかえそう

町田和行

4・21 天皇「在位60年」を問う。パネルディスカッション 基調

明治以来、愛国心と天皇への「敬愛」が同一視されてきた。ここから、わが新左翼・左翼活動家の多くが、天皇制と民族排外主義を批判する際に愛国心の問題を欠落してきた。

戦後「平和と民主主義」教育は、日本の右傾化・反动化に反対する運動として歴史的役割を果しつつも、日本民族の侵略・排外主義・戦争責任を自己批判し、民族の共存を求める平和教育としては、大きな限界を持つものであった。

その運動が拠って立つ教育基本法には、「民族教育」がなく、それ故、一億総さんげ論なる抽象的空文句で日本民族の戦争責任をあいまいにし（一億総無責任体制）、戦犯天皇を追いつめ民族排外主義を自己批判する思想的武器とは、とうていなりえなかつたのである。

天皇制を批判し民族排外主義と闘うためには、民族的自覚・真の愛国心に基づかなければ必ずやからめとられ敗北してしまう。

## II

民族は、封建制の胎内から商品経済の発展―産業資本の形成と国内市場の統一によって封建制の政治・経済的分散がうち破られる過程を通じて成立する歴史的産物である。封建制を食い破って成長してくる資本主義が、発展する社会的分業の綱目の中で市場の国民的統一をつくりだし、これに照応して、他と区別された民族の自覚・愛国心も歴史的に形成されてくる。そして、その民族を上台にして搾取・階級対立が公然と激化していくのであ

る。したがって、民族の形成を待たずしては、労働者階級の階級的団結も成長はせず、民族的自覚・愛国心と結びついてこそ、労働者階級の階級的団結も可能となるのである。

資本主義は搾取社会であるが故に、他民族の支配・従属を不可避につくりだす。搾取を廃絶する歴史的能力を持った労働者階級のみが、諸民族の独立・共存・互恵をつくり出すことができるのである。

日本の民族の統一・自立は、西洋のように資本家階級が封建制から闘い取れる程力強く自立してはおらず、「天皇家」を頂点に据えた絶対主義革命（明治維新）をテコに、天皇制ナショナリズムとして確立されてしまった。とはいえ、この天皇制ナショナリズムは、日本労働者階級の民族的・階級的結集をつくり出すという歴史的事業を担ったことは承認する。

だが、日本資本主義の帝国主義への転化と共に、天皇制ナショナリズムが「忠君愛国」の思想として民族排外主義に日本の民衆を動員する手段になったのである。そこでは、愛国心とは、「忠君愛国」であった。だが、天皇と「忠君愛国」の輩は、諸民族の協調・共存・互恵をめざすどころか、中国・朝鮮・アジアの民衆に平然と悪虐非道の限りを欲しのままにした。同時に、奴らは、日本民衆の愛国心を煽りたてながら、数百万同胞を無為に殺し、塗炭の苦しみを強制し、他民族への侵略・強盗戦争に日本の民族と祖国を引きずり込み、祖国を荒廃させたのである。そのくせ、自分達だけは、その戦争で私利私欲をむさぼり、

民族と祖国の財産を横領し、拳句は、自己の延命のためには、民族の主権までも米帝に売り渡したのである。天皇は売国奴であり、「忠君愛国」の思想こそが、民族と祖国を裏切る売国・奴隷の思想なのである。

### III

「人類愛」「血債の思想」で民族・祖国を超越した抽象的・空論的な国際主義も、戦前の「八紘一宇」思想も、民族を観念的に突き破り、抑圧民族側の勝手な「理念」を押しつける点では共通している。そして、新左翼の諸君の抽象的・空論的な国際主義は、大アジア主義への橋渡しの役割をも果たし始めている。この大アジア主義の「八紘一宇」の思想は、日本民族を頂点とした支配・被支配の民族秩序（大東亜共栄圏）をおおいかくすイチジクの葉（抑圧民族である日本民族にとつての）でしかない。両者とも、他民族が、独立した主体であることを認めた上で、独立・互恵・共存の民族関係をつくり出すものではない。結局は、世界の諸民族の中で自民族の位置を他民族との関係の中で把えようとはせず、自分勝手な「正義」の押し売りになる。「人類愛」・「血債の思想」・「大アジア主義」は、日本民族の優位性を前提にした極めてごうまんな思想なのである。

したがって、抽象的・空論的な国際主義は、個人的にはどんなにまじめであろうとも（幸徳秋水）、それは抑圧民族のごうまんさをぬぐいさることはできず、天皇制と民族排外主義と真に闘い切れず、敗北を最初から内に含んでいるのである。

### IV

今、天皇制と民族排外主義と闘おうとする我々の前には、二つの道が開けている。ひとつは、抽象的・空論的国際主義の道。これは、大アジア主義への転向・天皇制ファシズムへの敗北に通ずる道である。もうひとつは、資本家階級にとつてかわつて労働者階級が主要な担い手となつて実現される真の民族の自立と愛国の道である。

日本民族の民族排外主義と闘うというとき、日本の他民族抑圧の暴力から日本を解放しなければならぬ。戦争と排外主義に民族を組織し民族の生存を危うくする「国家」を打ち倒し真の民族の自立と社会主義の祖国を樹立する愛国の道こそ、民族排外主義と能く闘うことができる。この闘いは、日本労働者階級が先頭に立つて実現すべき日本民族の独自の事業である。この道こそ、真に日本民族の戦争責任を果たす道である。

レーニンは、「革命的祖国敗北主義」をロシアの民衆に訴えた。これこそ、当時のロシアで、真に民族の統一・自立と社会主義の祖国を樹立する真に愛国的で国際主義的な態度であった。新左翼の諸君の抽象的・空論的な国際主義から、この真に愛国的なスローガンを奪いかえし大アジア主義の導入路にされるのを阻止しなければならぬ。

### V

日本の民衆は、この民族・祖国に生まれ、この民族と祖国で死ぬ。この民族・祖国を放り出すわけにはいかない。

「現在の日本には不満だらけです、然し、私も日本人です」（石川啄木）。「日本に生まれたるを以って」自分の「最大の不幸なり」と考えたとしても、「いざこに行きたりとして日本人」。民族と祖国を愛するが故に愛国心は愛国心でもある。日本民衆にとつて、祖国を愛するしか道はない。だから、祖国が正しければ愛し、正しくなければ愛さないという「愛国心」は、この民族と祖国でしか生きえない民衆のものではない。眞の愛国心は、祖国に対する憎悪とともに愛情をも代表する。

明治以来、日本民衆の伝統・文化・生活の内にはぐくまれた愛国心を天皇制が組織してきた。天皇制ナシヨナリズムから愛国心を奪いかえさなければならぬ。日本の労働者階級は、この歴史的任務の最先頭に立たなければならぬ。

民族の誇りのみちあふれたわれわれ大ロシアの労働者は、その隣人との関係を、偉大な民族をはずかしめるような、農奴制的な特権の原則のうえにではなく平等の人間の原則のうえにうちたてるところの、自由で独立な、自主的で、民主主義的で、共和制的な、誇らしい大ロシアを、ぜがひでものぞむものである。このような大ロシアをのぞむからこそ、われわれは、つぎのように言う、あらゆる革命的な手段をもって、自分の祖国の君主制や地主や資本家、つまり、わが故国の最悪の敵とたたかう以外には、この二世紀に、ヨーロッパでは（たとえヨーロッパ最東部でも）「祖国を擁護する」ことはできない、「大ロシア人は、大ロシアの住民の十分の九を経済的・政治的に抑圧しているばかりでなく、彼らに他国民を抑圧することになれさせ、自分の破廉恥を偽善的な、あたかも愛国的なような文句によっておおいかくすことになれさせることによつて、彼らを腐敗させ、墮落させ、体面をよごさせ、操をけがさせているからである、と。」（大ロシア人の民族的誇りについて・レーニン）

1985年4月発行（政策パンフシリーズ第2号）

発行 燎原社（東京都千代田区神田佐久間町3-21-22やよいビル22号）

☎ 03-866-5893

定価 **300**円

一九五二年血のメーデー

単独講和条約 日米安保条約

の発効による日本のアメリカへの  
従属に抗議し、そして“皇居前広  
場は天皇のものではない”“人民広  
場た”と闘われた

